

長崎市

素材研究
(国内)



昭和40年代の暮らしぶりが「タイムカプセル状態」で残されている軍艦島



国の重要文化財に指定されている日本最古のアーチ型石橋「眼鏡橋」



2012年の「夜景サミットin長崎」で「世界新三大夜景」に選ばれた長崎の夜景



史跡 出島和蘭商館跡



国指定重要文化財の旧グラバー住宅など明治期の洋館を移築復元した「グラバー園」



整備事業が進む出島和蘭商館跡は、独自の歴史と文化を象徴する素材として、期待が高まっています

19世紀初頭の「出島」を復元 歴史・文化を切り口に商品化の取り組みを

「明治日本の産業革命遺産」の構成資産として注目を集めている軍艦島に続き、完全復元を目指す整備事業の進展で存在感を高めている出島。世界遺産登録への再挑戦を目指す教会群なども含め、長崎市は、独自の歴史や文化を貴重な観光資源として、その磨き上げに取り組んでいます。

将来的には扇形の島の完全復元も

長崎市では、「鎖国」の時代に日本で唯一の海外に開けた貿易地としてオランダなどから様々な文物がもたらされた出島の整備事業が展開されています。

もともと、1951年から着手されていた出島整備事業ですが、現在は、1996年3月に策定された出島復元計画に基づいて、19世紀初頭の出島を復元する取り組みが進められており、今年度は新たに出島中央部6棟の復元建物が完成する予定です。

長崎市観光推進課によると、来年度には出島表門橋の架橋も計画されており、「長崎観光の新たな目玉として、出島の存在感も高まる」（国内誘致係）見通しとなっています。

この架橋が実現すると、昔と同様に橋を渡って出島に足を踏み入れることで、19世紀初頭の海に浮かんだ出島も実感できるようになり、さらに、出島復元の長期計画では、周

辺の四方に水面を確保して、扇形の島の完全復元を目指す方針も明らかにされています。

軍艦島の年間上陸者数は20万人へ

昨年7月に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産23のうち、長崎市には端島炭鉱（軍艦島）や旧グラバー住宅など8資産が集中しています。1974年の閉山以降、無人となっていた軍艦島は、2009年から一般の旅行者も上陸が可能となり、2014年度の上陸者数は約19万人に達しました。

また、今年2月に政府が世界文化遺産への推薦をいったん取り下げ、登録への再挑戦を目指す「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の代表的資産で、現存する国内最古の教会として国宝に指定された大浦天主堂も、独自の歴史を象徴するものです。

長崎市第四次総合計画（2016～2020年度）では、こうした貴重な観光資源の保存と歴史的・文化的価値の理解促進などを通じて、2020年度に軍艦島の上陸者数を26万1000人（2014年度比で36.2%増）、大浦天主堂の拝観者数を62万5300人（同12.6%増）に拡大する目標も掲げられています。

長崎市観光推進課では、「観光資源の磨き上げにより、旅行会社にもユニークな歴史や文化を切り口とした商品化などに取り組みでもらえるようにしたい」と考えです。